里見八犬傳

卷一

へ13
709
1

曲亭馬琴著

八犬傳

東京名山閣版

第一輯

明治三十年十月九日購求
遠13 709 1

八犬士傳序

初里見氏之興於安房也德誣以率衆英略以摧堅平呑二總傳之于十世威服八州良爲百將冠當是時有勇臣八人各以犬爲姓因稱之八犬士雖其賢不如虞舜八元忠魂義膽宜與楠家八臣同年談也惜哉載筆者希於當時唯坊閑軍記及槇氏字考僅足識其姓名至今無由見其顛

山崎堂藏

末予嘗憾之敢欲攻殘珪自是常畋獵舊記不已然猶無有考据一日低迷思寢瞥聽之際有客自南總來語次及八犬士事實其說與軍記所傳者不同敲之則曰曾出于里老口碑敢請主人識之予曰諾吾將廣異聞客喜而退予送之于柴門下有臥狗在門傷予忙乎踏其尾苦觳倏發于足下愕然覺來則南柯一夢也回頭覽四下茅茨無客柴門無狗吠言熟思客談雖夢寐不可捨且録之既而忘失過半莫奈何竊取唐山故事撮合以綴之如源禮部辨龍根于王丹蘖龍經如靈鴿傳書於瀧城擬張九齡飛奴如伏姬嫁八房倣高辛氏以其女妻槃瓠其他不遑毛舉數月而草五卷僅述其濫觴未創八士列傳雖然書肆豪奪登諸梨棗刻成又乞其書名

予漫然不敢辭即以八犬士傳命之

文化十一年甲戌秋九月十九日洗筆於

著作堂下紫鴛池

蓑笠陳人解撰

世ゐの里見の八犬士八犬山道節朔郎直秋犬塚信乃志之犬坂上毛野乳名犬飼見八乳名犬吉川荘佐　犬江親兵衛乳名真平犬村大角乳名角太郎犬田文吾乳名小文吾則是なり。その名軍記ゑ粗ゝそゝく。本貫終始我審ゆ世びいと惜むべきのみならずやよろしく唐山高辛氏の皇女槃瓠犬の名ゆゑ嫁ゝる故事ゆ倣ふく。個小説を仕設因を推果を説こ婦幼のねふアを老をとめたり。

肇輯五巻ハ里見氏の安房ゑ起るよゝ我演亦是唐山演義の書。その趣ゝの擬しもるとゞ軍記と大同小異あり。且狂言綺語をりくゝ。我ハ俗語俚諺をまゞへいと嗚呼ゝげゑ綴るハ固よアを散物ゐるとゞ。

この書第八回堀内藏人貞利ゑ犬懸の里ゑ雛狗を獲る條ゝり。第十回義実の息女伏姫ゑ富山の奥ゑ入る條ゝりゞ。これ全傳の発端ゝ。ゝるとゝ首尾具足ゝて全體を綱ゝとる。二輯三輯ゑ及てハ。八人ものく列伝ゝり。末ん春毎ゑ嗣出ゝく全本ゝなるさんと西三年の程ゆなん。

蓑笠陳人再識

有像南總里見八犬傳筆輯總目録

第一回
季基遺訓死節　白龍挾雲歸南

第二回
飛一箭俠者悞白馬　棄兩郡賊臣倚朱門

第三回
景連信時暗阻義實　氏元貞行厄從館山

第四回
小港義實集義　芭内孝吉逐讐

第五回
良將退策衆兵知仁　靈鴿傳書逆賊贈頭

第六回
聞倉廩義實賑二郡　奉君命孝吉誅三賊

第七回
景連奸計賣信時　孝吉節義辭義實

第八回
行者石窟翁相伏姫　瀧田近邨狸養離物

第九回
破盟誓景連圍兩城　信戲言八房獻首級

第十回
犯禁孝德喪婦人　裂腹伏姫走八犬子

肇輯題目通計一十十回完

浪中得ル上リ龍門ニ表
不レ數ヒ江ー河歳ー月ノ遷
雄子尓春
忍光八
難波江乃
始垂毋
辛之河尓
加久尓
世波
著作堂
金碗八郎孝吉
里見治部大輔義實

周公恐懼流言日
王莽謙恭下士時
若使當年身便死
至今真偽有誰知
白居易讀史詩
山下柵左衛門尉定包
神餘長披奴
光弘が嬖妾玉碑

何ぞ我おりひもとくとも老ひ行く
えこそ九ちもとめすやハ百九夜寒月冴
内藏人
朴平
麻呂小五郎信時
安西
二郎太夫
景連

深宮飽食
恣猟獵
臥榻眠氈
慣不驚
伏姫
却被捲簾人放出
宜男花下
吠新晴
元貢性之詩
里見義實の愛犬八房

正夢
鹿や
照射山
東留舎
羅文
金鞠大輔孝德

八犬子孫

犬塚信乃

平居勿時汝
青年越此書

犬坂毛野

犬村角太郎

犬田文吉

犬江真平

犬山道松

犬飼玄吉

犬川荘助

歳白地藏の之圖

あげまきも
ゆとぐ
たゆ
をもとふ
おの見張へ
しげ
友草

定家卿
和歌

犬坂毛野

山崎文庫

曲亭家傳神女湯 一包百銅

○巻端半頁の餘帝あり。我が生涯業の貴を錄し、世の君子に告ること左の如し。

こゝとの作者が家傳の良方婦人諸病の神薬なり。相傳五世に及べり。家より難産夫折の婦人あるとき、これを用ひ、産前産後ともに即効あり。つゝみ紙に包みて、ひとり産前産後のみに用ひ、他人に授けず。その功抜群、自餘の賣剤に比べ、きこゆるなり。

家方

つゝ虫の妙薬 一包十四銅半包三十二銅 婦人毎月つゝやみ、あるいは産後に死せむとするを救ふ。世に稀なる妙方なり。

精製奇應丸 大包二百粒余入代銀米中包三十六粒入代一匁 小包十粒代五分 但五分以下小売不仕

世に名ある丸薬にて、製法の秘密なる、南海の奇薬、九の名あり。とくに極品とす。まさに奇應丸の名あり。

賣剤

法に則りて、製法むつかしく、薬品もとより異なり。その功百倍万倍なり。

諸病針灸療治 毎月七日 十七日 廿七日 三日 十三日 廿三日

所在の人、入来せば、薬を授け、治療を施す。江戸元鼈町中坂下南側四方みな店向 瀧澤氏精製

賣所

右製薬弘所并施療

取次所 大坂心齋橋筋唐物町南入 書林 浪花芝神明前 書肆いつゝや市兵衛

○招牌及報条能書必乾坤一草亭の印記あり。此印なきは偽剤なり。

南總里見八犬傳卷之一

東都 曲亭主人編次

第一回

季基訓を遺して節に死を
白龍雲を挾みて南に帰く

京都の将軍鎌倉の副将武威衰へて偏執世に戰鬪とゝまり難を東海の濱に避く。土地を闢き基業を興す。子孫十世に及ぶまで房総の國主たる里見治部大夫義実朝臣の事蹟をつゝく考るに清和の皇別源氏の嫡流にして守府将軍八幡太郎義家朝臣十一世里見治部大輔源季基ぬしの嫡男なり。時に鎌倉の持氏卿自立の志頻りに執権憲実の諫を用ひず。忽地嫡庶の義を忘れて室町将軍義教公と確執に及び、京軍猛くして憲実力を戮して且戰ひ且進む。持氏父子を鎌倉に囲む。報恩寺に押籠つ。浩

山崎文庫

腹を切せたり。是ハこれ後花園天皇の永享十一年二月十日のことなりかし。かくて持氏の嫡男義成ハ父とともに自害して。屍を鎌倉に留むといへども。二男春王三男安王とかいふ也。公達ハ辛く敵軍の囲を脱れて。下総へ落のがれ。結城氏朝迎とりて。主君と仰ぎまゐらせ。京都の武命に從ハず。管領清方持朝の大軍をも屑とせず。されバ義に仗て死をだも辞せざる里見季基を首として。凡持氏恩顧の武士招ざれども来り集りて結城の城を守りしかバ。大軍に囲れながら。一トたびも不覚を取らず。永享十二年の春の比より。嘉吉元年の四月まで篭城三年に及びけれバ。外に援の兵なきまゝに糧も矢種も竭果つ。今ハはや脱るゝ途なし。只この上ハ死するやとて結城の一族里見の主従城戸推ひらきて血戦し。込入る敵をうち靡けて。衆皆討死する程に。その城竟に陥りて両公達ハ生拘られ。美濃の垂井にて害せらる。俗にいふ結城合戦とハこれなり。かゝりし程に季基の嫡男里見

治部大夫義実ぬし。このとしハ又太郎御曹司と喚れつゝ。年なほ十九に満ざれど。武勇智略ハ父祖にもまして。その才文道にも長たり。三年以来父と共に篭城の艱苦を厭ハず。この日も諸軍に先だちて。敵十四五騎斬て落し。今ハとて死敵と引組て。討死せんとて進ミしを。父の季基遥にこれを見て。遽しく喚びとゞめ。我それ義實勇士ハ元を喪ことを忘れずといへども。限りとしるを理りあるに似たれども。父子ともに討死せバ。先祖へハ不孝これにまさるなし。京鎌倉を敵として。貳ごゝろを存ざることなく。勢竭き力窮り落城のけふに至りて。父ハ節義の為に死し。子ハ又親の為に脱れて。一命をたもつとも何か羞ることかあらん。速に殺脱て時節を俟て。家系を再興せよとて。落よといそがせバ。義実ハ答へず。鞍坪に頭を低けつゝいひぬ。老人ハあれど親の必死を外にみて。阿容々と脱るゝをハ三才の小兒も要せず。况弓箭の家に生れて。某まで十九歳文武の

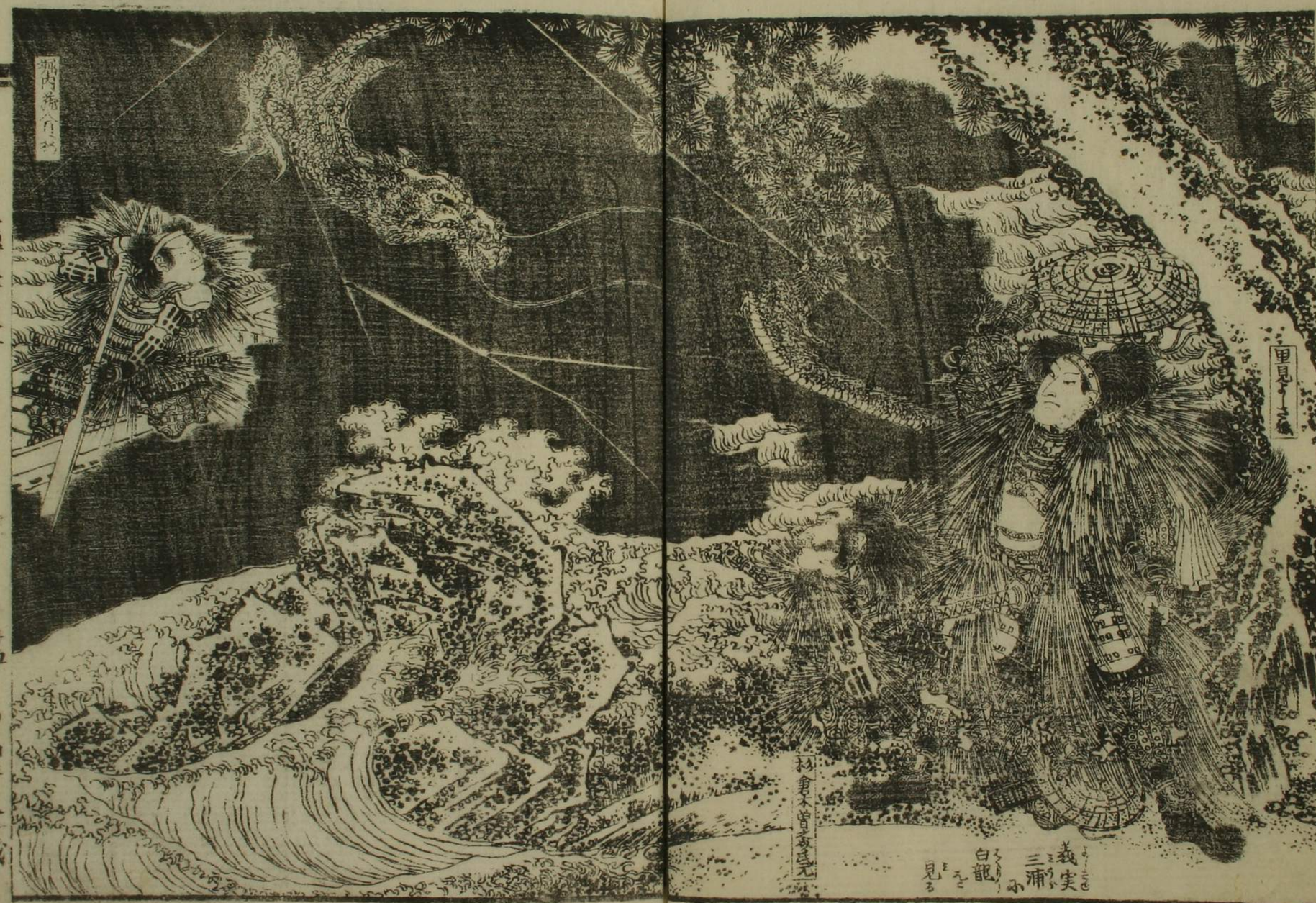
道にこゝろ入りて順逆邪正。古人の得失大槩はこれをしれり只冥土黄泉のおん供とてをゝかひ倶れ死べき処にあらぬ死をしなば。笑ひを招き名を汚し。先祖を辱しめ奉らんこそ死しても尤なれと答る辞勇しき貞心もちゝまゝ父は頬に嘆息し美実織なり。ありさりながら圓頂黒衣に容を更め出家沙門になりとも、親の教に悖りもせぬ。時節を俟て家を興せといふを推辞は不孝なるべしや足利持氏は天譜代相伝の主君にあらず抑わが祖は一族なる。新田義貞朝臣に従ひて元弘建武に戦功あり。しかりしより新田の餘類南朝の忠臣たりしども。明徳三年の冬のころほひ南帝入洛ましまして愚も樹下雨漏りしより。おのれそむかで鎌倉なる足利家の招きに随ひたりし。亡父は鯉見大炊満兼主の持氏卿に出仕し。これは持氏ぬしまつへて今幼君のために死を杏は致しがたて其理義を辨へたぞ。只死する武士といへども。向も又そのかひなし。かくまでいふを用ひずハ親とよびそ子にあらずと辞せはしく敦圍ますれバ義実道理に責られて。はや馬乃髪亂へ落き涙ハ道芝に結ふがごとく本の雫末の雫と親と子が後れ先だつ生死の海より哀なる鯨波の声はるかに進む敵軍を季基信と見えたりく時移りて六ろのへどとやふと立て暫く豫てよりまちおろさせし譜代の老党杉倉木曽介氏元堀内蔵人貞行は小注国とあらくけ立ず両人斉一勇を起し俺們もお供つかまつらん。誘ふべしといひあへず木曽介は義実の馬の轡を牽めぐらし蔵人はその馬の尻を拍て逐走らせ西を指てぞ落てゆく。むかし彼楠公が桜井の驛よりその子正行を返しゝあはれにおさおさ劣らぬ忠魂義膽。ありありと想像り残り留る兵士に。撤退せよと別居たる。季基は落てゆく吾子を霎時目送りて。今ハしも心安しと。さらバ最期をいそがんとて。鞍の緒わかつ馬騎ハ十騎に足らぬ残兵を鶴翼に備へて群り来つる大軍へ会釈もなく突て入る。勇将の下に弱卒なしといへど主由家

隷も二騎三騎。敵に拏れざるものハなく。然に所ハ義実を後ざまに落さんと思ふ外又他事なかれバ。因にあまる大軍を一足も進せず。射方の死骸を蹈踰て引組バ。刺ちがへ。あるひハ枕を臥かどを大将李基ハいふもさらなり。八騎の従卒一人も残らず。貪乱軍の中に撃れてく。鮮血ハ野逕の草を染なし。髑髏ハ彼此に筭を紊しく。馬蹄の塵に埋といへども。その名ハ朽ず。華洛まで立のぼりたる丈夫の最もたけしき最期へざる程に。里見冠者義実ハ。杉倉堀内に扶れて。十町あまり落延つゝさるにても厳君ハいかなりけん果をもしらで。おぼつかなしといひつゝそゞろに馬の足掻を駐めて。見かへる方ハ関の声。矢叫の音嵩しく。まや落城とおぼしくて猛火の光天を焦せバ。吐嗟とばかり叫びあへず。そゞろに轡を回して。驀んとするを。しかじかと両個の老党左右より轡を携て。動せじとハ物体なし。今更にめゆや和殿。まさらん大殿の教訓ハ何とか聞召たるぞ。今落させ給ハ城に還て可惜おん身を喪ひて。古歌にも詠る夏虫の火むしよりなほ果敢なき所為なり。夫大信ハ信ならず。大孝ハ孝ならぬ如しと古人の金言日来より口順なれバ似げなし。尤貴死も嫌死も。忠孝の道ハ一條なるを迷ひあれバいかでや。さるにてハ本意せしと牽駒のとゞろとなる孝子の哀傷頻りに焦燥声をあげしく放せ負わ禁る氏元係連に諫られ。親のおもとなるのすべきれど今とれとしも恩びあるべし。これ人の子といはれんや。放せ。と鞭を揚て打どあふれど玉匣ぬ等しき忠臣の拳ハ金石。此ほど縷めぞ鞭をも随に害ぞてゆく。馬ハ壇穀敷も柳坂げなりハ後に遠離火退林のほとりゆく。勝誇る滝倉勢二十騎あまり追蒐来つ。適武者態逸足をやし。緋威の鎧きて五枚甲日ハ秋峯形の間に耀く白銀のや。中黒の鏃ある大将とつれる六隣目欽逢し返せと喚りけさり。義実ハ此も擬議せずとあるがまゝや雑兵ハさわぐ。敵をむかへて走るにあり狂が返きなば難そとあらんやとて馬をとゞめ立るに太刀抜翳て進みあり。

大将を撃せじとて杉倉堀内推並て敵の矢面に立塞り。鎗を捻て突崩せバ。義実ハ亦老党を撃せじとて馬を馳よせ前後を争ふ主従三騎大勢の真中へ十文字に蒐通て旋て巴字にとつて返し。鶴翼に連て更に魚鱗にうち違り。西に當り東に靡け。北を撃て又南に走せ馬の足を立させず。三略の術。八陣の法共に知ざる道もなけれバ。目今前にあるとされハ忽然として後にあり。奮撃突戦秘術を竭し千変萬化の大刀風にさしもの大勢乱騒ぎて。むら〳〵と引退ハ。敵退けハ杉倉等ハ主を衛て徐こと落る程に更に跟て来る端武者ハ遠箭に射て落し。追ひろへら林原三里が程送られて。終に日ハ落る夕日の迹に十六日の月圓なるのきつより追来る敵ぞなけれバ主従不思議に虎口を脱れて。その夜ハ白屋に宿りを投め。早立の置土産に馬且ハ銭なるぶふとらせて姿を窶し。笠深ふらし東西まで敵地なれども聊志をゝさなるにあれバ相模路へ走りて。第三日めにて三浦なる矢取の入江に着ぬ。国より裹む糧もなく盤纏乏しき落人となりも果たる主従ハいとゞう饑疲れて松が根に尻をかけ。遙に後をし堀内蔵人貞行を候ひて安房の洲へ渡さんとて轍の鮒の息吻あへど。こゝをまた八国も過る入江に續く青海原波しづかにして白鷗眠る比ハ卯月の夏霞棚引わたる鋸山彼かとぞいふなり。指せバあなにも鑿のして穿るし刀して削るがごとき青壁峙てあやうくも危き長汀曲浦の旅の路。心砕くるのびとつなるに雨を含る漁村の柳安を送る遠寺の鐘いとゞ哀れを催すのかくてあるべき身にしあらねバおなじ津をとのそげとも舩一艘もなかりけり。當下杉倉木曾氏元ハ苫屋の門に乾魚とり納る白水郎が子どもをさし招き。喃髫髪ホよ汝向ひ前面へこえてゆく舟ハなきにや。熟ぬ浦曲に流浪ひとへに饑るふたりハとにもかくにもあるこの君へ

物あらば進ぜん。と宣ふ。そこ中に年十四五なる惡太郎。赤熊に似たる
額髮潮風に吹黑れ。顏は垂々を穫も揚ず。擇ばるゝ色青淵紙咥り
籠ゝまゝ出癡たる。武士の人々。折づく合戰は私に過半借とられて漁獵
ぶるも物足らぬは。誰人か前面に人をとらんされば又この浦は汲む涯なるかな
よ。世に乏ぶ腹ひとつ肥しかぬるに剩へ氏元
まぐ脾撓くこれを食へとあざけ嘲て塊を擂取つ。投うけんとするに氏元
元甲冑をもうけば堤に衝と飛越て。松が根に尻をうけて義實の胸前に閃く
刃れば自若として。左のうで刃を反らし右手ゆゞこれを受ぬ。猶憎むべき爲体に
氏元の要時ぬる嫉ぎ眼紙睜り。声をあらゝ立て鳴平るる癖者なる孩るんばこそ
汝に一碗の飯式もあれ糧なくんばとのふとも辞は物に没ず。紙に書れるる
呼約も限りあり。いでその頃欲刻なくば。刃の鞘に紙掛て

走り離れんとすれども。武實急に石禁め。木曾の大人(義)麒驥も老ては駑馬
に劣り。鳳凰も竈まぶ。蟻蝦の為に苦むる。昨はきのふ今はけふ。ぶるる紙
刃を立れば。欲彼に敵すべき足らぬ。めつらく。め紙業もるに土に豆腐の
基。と。今安房へ渡るに及びて。天その関紙なんの兆欲彼を立れ人とぶる
とぶふ。憎むべき嫉ぶり。これを吉祥とさるとぶ紙ぶべ紙ぶるるぶるぶや。晋乃文
公が五鹿(漕岡の地名)の故事。よく今日のとぶ似ぶる。笑まぶべくとぶべ紙ぶ。祝して塊を三度
戴さそぐ。懷へ挾ぶ紙氏ぶ。曉て刀の鞘に掛ぶ紙と。怒ぶ紙解ぶ紙そのぶく
とぶ紙。憑ぶ紙主君を壽ぶ紙ぶ。白水郎が子どもは常に紙拍ぶ。いとゝ紙ぶ
笑ひぶ。時に磯山雲叢立て。海面俄頃に晦ぶ。磁石に塵の吸ぶるごとく。
潮水頻りに逆上り。風颯々と吹ぶ。雨は彼鞘岡の篠より繁く降ぶ。
電光ぶるぶく。雷さへもとゞろくしく。落ぶぶく鳴撲けば。倀僮とぶは劇驟ぶく。



○山青堂藏

苫屋をさして走入り。裡より鎖して敲けども開けず。かくて義実主従ハ笠やどり
せんようのなさに只入江の松の下蔭に笠を翳して立在す程に風雨やゝとく
烈しく或ハ晦く。或ハ明く。よせてハ砕け。砕けてハ又立かへる浪の色に廻翔る雲の
中に物こそあれとつらつら臨観く。忽然として白龍顕れ光を放ち浪を巻て北に立
南を投て飛去る。且して雨霽雲をさまりて日ハ波のかなたに斜なる海に残
春く波ハいろどりて精を抒ふ松の雫。吹拂ふ風に散る玉ハ沙石の中に輾渡る。
山ハ遠くして翠ふかく。巌ハ青くしていまだ乾かず。瞻るに倦ぬ絶景佳境に。
身の憂を忘れハあつろ止くもと氏元ハ義実の衣の湿吹気を拂ひなどして後れ
さる貞行氏元今しかくと候ふに義実海面を指して向ふに雨いと烈しくて立騒ぎ
たる浪の間に叢雲起りて廻翔り。彼山岩のほとりより白龍の升りしを木曽
汝ハ見ざりし歟と問れて直と足を跪き龍とハ總めいへども物の腹かと
おぼしく輝かゞやくと鱗のみえしを僅に見てしとのたまへば義実うち点頭れハそ
そのゝちるこれハその尾と足の見えざりしを憾むべく惜べし。全身を見ざりしを憾むべく惜べし。
夫龍ハ神物也。変化固より測るべし。古人いへることあり。龍ハ立夏の節を候て
分界して雨を行と云。名づけて分龍といふ。今ハ則その時也。夫龍の霊なるや。
昭として遠く顕れ隠として深く潜む。龍ハ鱗虫の長たるが故に周公
易を繋て龍を聖人に比へり。然りといへども龍ハ欲あり。聖人の無
欲に及ばず。故に人或ハこれを豢ひ或ハ御する者あり。或ハ屠る。今ハその術伝るもの
なし。又仏説に龍王経あり。大凡雨を祷るもの必これを誦す。又法華経の
提婆品に八歳の龍女成仏の説あり。善巧方便といふとも祷て験を得難
しあり。この故に龍を名づけて雨工といひ亦これを雨師といふ。その形状を
辨ずるときハ角ハ鹿に似たり。頭ハ駝に似たり。眼ハ鬼に似たり。項ハ蛇に似たり。

腹は蜃に似て。鱗は魚に似て。その爪は鷹の似く。掌は虎の似く。その耳は牛に似て。その目は三停九似といふ。又その含珠は頷にあり。司聽といふ角を以て。喉の下長経尺ばかり。逆鱗と名づけたり。物あらくこれを中れば怒らざることなし。故に天子の怒りを逆鱗と云ふ。雄龍の鳴とは下に風あり。その声竹筒を吹ごとく。その吟ずるとは金鈴を振ごとし。彼は敢衆行ずして又羣處をみず。合すとは体を散ずとは章成りて雲気を乗じ陰陽に養れ或は明に或は幽なり。大なるとは宇宙に徜徉し小なるとは巻石の中に隠る。春分には天に登り秋分には淵に入り。夏は迎れば雲成り凌て鱗を奮ふ。これその時を楽しみ。ときとうれば泥に淪み潛蟠して敢出ざる。これその害成避べし。龍には種類ありて。應龍あり。蛟龍あり。先龍あり。黄龍あり。青龍あり。赤龍あり。白龍あり。元龍あり。黒龍あり。白龍物を吐とは地に入て金となり。紫龍泥を負とは沢を透て玉の如し。紫稍花は龍の精え。蛮貊蕃て茶に入る。鱗あるは蛟龍なり。翼あるは意龍。角あるは蘢龍と云ひ又蚪龍とも。これを鮫龍といふ又これを螭龍といふ又蒼龍は七宿に班龍は九色なり。目百里の外を見ること成名りて驪龍といひ。優楽自在なるは福龍と名けたり。自在を汎さるは薄福龍害を為ばこれ悪龍。べと殺ばは毒龍。又苦て両を行ば則乖龍。又病龍のあり。せ一両はその必腥しいやぐ。升天せざるは易。又呼渭蟠龍。蟠龍も長四丈その色青黒しく。赤帯綿文の如し。火龍は七尺あり。その色は真紅めくく。火雛炬を裏るがし。又癡龍あり。懶龍あり。龍の性は淫ふしく。交ざる所えば。午と交れば麒麟を生む。馬と交れば龍馬を生む。

又九つの子を生む説あり。第一子を蒲牢といふ鳴を紙好むゆえ撞の龍頭ハ
と云紙象る。第二子を囚牛といふ音を好むゆえ琴鼓の飾ゝとれを付。第三
子を蚩吻といふ呑を紙好むゆえ盃盞飲器ふち紙画く。第四子を嘲風と
いふ險を好むゆえ堂塔樓閣の角これを象る。第五子を睚眦といふ殺を紙
好むゆえ刀の飾ゝとれを付。第六子を負屭といふ文紙好むとかや。
いふへの龍象印材の扭文章星の下ゝ画く。龍の如くゝの見え。第七子を
狴犴といふ訟を好むゆえ。第八子を狻猊といふ狻猊ハ乃獅子ゝ坐さる
ゝ紙好むゆゝとぞ。倚子曲彔ゝ象ることあり。第九子を霸下といふ重を
負を好むゆえ碑の足火爐の下ゝ物の枕ゝとるゝ鬼面のごとくハ則ち是なり。
とれらの外ゝ又子あり。嚢章ハ囚を好む饕餮ハ水紙好む蟋蟀ハ喧を好む
蟄蜍ハ風雨紙好む螭虎ハ文章を好む金猊ハ烟を好む椒圖ハ口を閉る紙
好む。蚣蝮ハ險を立を好む。鼇魚ハ火紙好む金吾ハ睡ざるゆゝとぞ皆これ龍
の種類なり。大なるゝ龍の德易ゝとろくハ乾道ゝ物ゝとろくハ神聖なり。
その種類の多くを入ゝ上智と下愚とあり。天子匹夫のめくるる所龍ゝ
威德とのゝく。百獸を伏するゆゝ天子も亦威德をのゝく百官を率ゆゝ故ゝ
天子ゝ衰龍の御衣あり。天子の顔を龍顔と構又ゝ形體を龍體と
唱。怒ゝ色の紙逆鱗といふ。ゝる是龍ゝ象ゝ。その德枚挙べゝ今ゝ
白龍南ゝ去。白ゝ紙ハ源氏の服色ゝ南ハ則房總ゝ八白王國の盡処ゝ
その尾をゝ紙ゝ紙ゝ偉ゝ彼地を領ゝ汝ハ龍の股紙ゝ是
ゝ服膺の臣ゝ。ゝ正首ゝ和漢の書を引古實を述ゝ
ゝ思量り後才叡智ゝ氏元ゝ感傷一武分の家ゝ生
ゝ匹夫の勇ゝ誇ゝ兵書兵法ゝ通ゝ今の時ゝ

稀ニ見ル。ヨロコビ人もつゝぬ書をいつのまゝに続つしをひ
くんさもろくておのづから。物に博くハ天の化る君ハ寔に良将なり。今十七
ちろ世結城ゆく処死ざるべき氏元が。ちゞの憾とうらゝ人なる命めで
くけのまゝあの教びとをもまもるゝ。ぬぽくまゝの憑しに日ハ暮
果てゝひとも要るの死入ぬ明さんや。安房へあん使つゝうらんと必人ども
船かるゝ。天ハ晴ても甲夜間に月ぬ出ぬ焦燥
のゝ。せんまゝ入るの死ハ水ぬとハ思ハでや。流れさる堀内貞ぬ今ものぐの。
おのらぶる工一甚不審富貴ゆハ他人も合ひやゞ〻死時ハ妻子も離る人の
城ぬ経るの見ハ渠さ途より逃ぬ。ひけんぬ〻つるのゝいと。いひんく肩根うち
ゝとれば義実莞爾ともうち笑ひて。さる疑ひそ不曾ぬ老堂忠君堂ハ
中ゆく彼と汝ハ人るのゝ。ゝぬ表あるべしそある大人擇せひて五侍

ぬ属させるのゝ。ゝれも赤貞ぬ人とるのハゝく知ゝん。難ぬ臨さ、
主を棄逃かゝ。ゝめまゝあゝゞ今雲時あゝゆく侯ん月も出へ死比るぬと
物に障らぬ。その美も。ぬの底もいと廣き。波ゝ生る十八日の朋ぬ
浦波や。金紙集め玉を敷龍宮城もかゝゆゝんとく。主後頭、ゝ弐翳。
ゝゝまゝの木蓮をとゝれゝ。彼方源人おのゝ浩知ゝ快紀一聴水崎のゝと
ゝり漕出ゝゝ。おゝのゝ人ゝりゝ。とゝる程ぬ。ゝゝ死と矢の如く間ちくゝるゝくぬ。
紀の中ゝゝ声ゝく。へ弊あゝゞ。ぬの美ぬ菖ける。濱屋ゆも。船の宮渡ぬ。ひ
てゝゝると口実む一首の古歌仲正家集を。水主ハ何とゆゝ考ゝゝ。そゞゝゝぬ
漕ゝゝゝ。件の人ハ纜と。破の中へ投ゝ。ゝゝゝ。その刻も思ゝゝと登ゝ立ゝもゝん
きゞ掘内貞ぬ。こゝゝいゝぬ。とゝゝゝこの主後禅同貞ゝ先ぬ立ゝく舊乃
拠下ゝ坐を占ゝハ貞ぬハ松の下ゝ紙撥ゝせゝく小勝紙著向ゝ相摸

逐入入り〜ふる。渡海不便ふゆよし〜弐。灰よゆみとくひへべ。提燈ふる先人去て昊首
彼首ふる宿屋ゆく。津弐求さども私を出さび。ゆたくく水崎ゆ赴弐漁
舟を借ふくまとる。餓させゆふるゆとく。飯を炊せゆ粕ゆ雷雨烈〜く
ふりしぶ。ゆふび彼処ゆ日を消。かくの如く逢系せふ。そびめくふこれらのふ弐。
をゆとふるべぶふ〜〜くゆぶ〜石ケん。といふを義実ゆむへぶされべそのゆざる
この欲。これハさらふるり木曾ゆも。あらふ私のあるゆ一切ゆひうけざふ弐。
り〜義人ゆふるせバ今宵ゆでふ安房へてたん寔ゆふよふ弐才学ふれと
口ゆ曾嘆賞ゆゆハ氏元ハ額を拊人の才の長弐短弐かくやそく差別あるゆ欲。
ゆよ義人ゆ〜かふ時ゆハ疑念も蔑ふぬ。おのゆ弐の淺漠ゆまよゆ深弐思慮
ある和歌を狭〜く。今ゆぐくふくいひふえと咲て告ゆび負弐ハ腹を
抱てふちゆゆ現二戦の隔ふた。兵士の交ハかくふてあれと義実も共ゆ

笑悔ふハゆ。かくて又義実ハ義人負弐ふうち製ひふれハ前面へ渡ふふて。
あくゆ没を弐れどゆ堺の賜あり。又白龍の祥瑞あり。これらハ私ゆく潭んと
ゆふ声を発とふて。水主ハゆを抗さ〜招弐丹ゆふ〜風もふ〜。ふく私ゆ
乗ゆと促さ隨ゆ主後三人乗弐び揺揚く棚ふ〜小舟水主ハ纜ゆ繰ふさて。
取ふれを棹のふこかくれ。安房をふてて漕去ぬ

第二回

一箭を飛〜く俠者白馬を悞
西郡を奪ハて賊臣朱門ゆ倚

安房ハ原總國の南邊ふり。上代ゆハ上下の分別ふ〜。後ゆふふちて上總
下總と名けふる。土地擴漠〜く桑多〜。蚕飼ゆ役あふ弐りて總を貢と
ふふ〜〜。その國をも總といひふり。かくく總の南邊ゆ居民舞ふ〜〜
ふべ。南海道所彼國ふる民をまくく選〜ゆひて。ゆくく安房とぞふゆせのひぬ。

山崎文庫

日本書紀景行紀ニ所云淡の水門ハ是ニ。安房ハ僅ニ四郡ニして平郡
といひ長狭といひ安房といひ朝夷といふ。むゝ仁安治美の間平家世ざろ
ろゝ比ろ。あゝ三人の武士あり。東漢ニその名つたへたる。御厨の麻呂
五郎信俊安西三郎景盛東條七郎秋則これなり。治美三年秋八月
源頼朝卿石橋山の軍敗ぶて。安房へ赴たまひ。件の武士ハ第一
番ニ隨後ひて。安西三郎景盛ハ鄕導をつとまろ。麻呂信俊東條秋
則ハ硯筥を敵ひて。至二の志をあらハせり。源氏一統の後彼人々ハ安
房四郡を分ちて子孫十餘世相続ス。世ハ北條ニうつり代りて
足利家の時ハ衰ぶ。その本伝を失ひぬ。景盛ハ十二世の孫安西三郎大夫
景連ハ安房郡舘山の城ニあり。信俊ハ後裔ニて。麻呂小五郎兵衛信
時ハ朝夷郡平舘の城ニあり。又長狭郡。東條ハ氏族ニて。神餘長狭ハ

光弘ハ。秋則ハ後ニて。平郡の瀧田ニ在城せり。ハゝ是も舊家といひぬべし。
神餘ハ東條ハ所領を合して。安房半國の主ニて。長狭平郡の両郡を
管領して。家臣後数少ニて。馬物具のハゞさらに物ともせずして不
足なれば。安西麻呂を下風ニ立て。推て西主と称ス。かゝれば光
弘ハとて驕りて色を好ミ酒ニ酔りて飽ニて。側室勝妾ニうる中ニ。
玉梓といふ遊婦を寵愛して。内外の賞罰ハ渠ニ問て決せしかば玉
梓ハ賄賂ニめハ罪あるも賞せられ。玉梓ニ媚ハ功あるも用られざ
ろ。家則ハ乱れて。良臣ハ退て去り。佞人ハ時を得ろ。そハ中ハ山
下柵左衛門定包といふあり。是ハ父ハ青瀆ニて草料場の預ニて。
碌ことなく。ハ子ハ定包ハ人とて。相貌ハ人親ニ肖ハ面色白ク
眉秀ク眉平ク。齊朱ク。言語柔和の徳ありて。光弘これを召仕ひ

近習なれバ寵られける。現女調内奏ハ佞人の資え。柵左衛門定包ハ陽に行状を慎て陰に奸智を逞し。栄利を縟る癖者なれバ。初より玉梓に佞媚をとりて寵る渠が好む物とし㆑ハ價を厭ず贈る程に。漸こに出頭しつゝ。口才主君を欽せ酒醴を濃て淫楽を勸め。剰玉梓と密通して尾陋の擧動多かりけれども光弘ハ夢にだもこれを曉らせず。いく程もなく定包を老臣の上に座らせ藩屏の賞罰大小となく皆任用しられけれバ。その權山下一人に帰しつゝ主君ハあるもなきが如し。かゝれバ志気あるものハ主を諫めて身退き。又勢利に遷るものハ。さらに媚て定包が尾髯の塵をとりける。讒を搆て譏を禦ぎ。利害を説て舊法を更め。税斂を重し課役を累て民の膏をしぼれども。現の山下定包ハ神餘が家の禄山なるべし。その出仕する毎に白馬に騎し。人目を側てしむるゆゑ。宰に白妙の

人喰馬と渾名負して。途にあふものハ避ざるもなかりけり。不題瀧田の近村蒼海巷といふ處に。杣木朴平と喚るゝ莊客ありけり。戰國の俗習として撃劍拳法いへバさらなり。膂力剛く。こゝろ悍く。難に臨てハ死をもおそれず。侃侠を主とせるものなりけれバ。神餘の家則いたく乱れて民のくるしびたえざるありしを憤りて、山下柵左衛門が所行の非義を見るに堪ず。これに劣らざる洲崎の無垢三といふ友だちを潜やかに招きよせて、和主もしらであらん。白妙の人喰馬ハ轡をゆるして民を虐け田園に禍をなすこと蝗のむしより酷し。罪なき人を害することハ疫鬼に異ならず。遠奴なりの所行かくてわれも我も人も何ともなく。妻子を養ふべき苛法に随ふもこゝろならず。惜べきのみ。彼手こゝに毫とられて餓も凍もせでらるん也。法もあらざるなり。所詮二人が身を棄て人喰馬を撃殺し。群の人の苦を援ばいかに

愉死するのみぞや。と潸然として垣三が一撃に及ぶべうち点限あるの勇士
くもいられさう。されも又とのる式ぞうぞるかあらん。這奴が威勢圏主が
ものく。生るとも死も入るとも死も。数十人の後者あり。かろ〳〵しく式下
さび。毛を吹疵を求やせん。矣の中が刃を隠し人の心の憑〳〵かう移が。
けのさぐゝ黙止さう。そうほる和主をうるく心中の枝密を告さくられと
志をおのづうま。鞍の翼を獲さるる勝ぞうさびとく。率が縛を
たうらび。化る命式失れん。ゆくゝ這奴ぶ拉山のわ。後者も裏うぬ微行の
日を俟べ。ゆゑ式遂びとのをあらじとぞかいふと密語ば。朴平斜るまと
訣びとく。そうらびとせよ。ものせんとく。迭る耳式とうし。密語数度に及
びう。現楊震ぶ四知の戒や壁ゆも耳のある世るるびけるかゝもこのつの式
ぞるとるれ柵左歩門ゆで報知さうける。定包ゝこの旅る驍びくる氣色も

るる。俄頃が鞍兵を召聚へて。彼朴平垣三が搦捕せんとおくれとも。
忽地ぞ入つてとありて。列る謀を獲さうしてび件のるゝはぢめうう。そうら
ぬおりちゝくが後者の数式倍〳〵。晨る出び夜行せびそうく仇と
徳ぶ祖る。主の長挟攻光弘ハ長夜の淫楽がその身を忘れて。日と月とが
病を生じ美酒珍饌を甘うらび鄭声艶曲も楽うら拯ば不死の薬式
蓬莱る求め。不老の術を方士る問ひ。秦皇漢武のおもひる異るもも
玉梓が嬬を捲ゆゝく。帳中を出されば折てそよ〳〵と定包ハ有一日主君が
やうびる時ぞ夏の初ゆく。野山の新樹もいと愛〳〵。落羽囀の野雞。
青菱村の雲雀。組るゝ不る集るる。閑居くのゝ座さば病をやうさせるひ
るん。狗を走らせ鷹式放も養生のひとつよりて某ぞん。倶仕らん。ものひ
立せのハぞや。とそのうび傍より。玉梓ぞれを奥じう。ゆる共が勅〳〵光弘

山青堂蔵

ものとり刀を起し。これとふかくを懐くこと久しく城外へ出ざりしに今你達が
ゑんげん練云ハ口苦くとぬ良薬とおぼゆ。ものこの習ハ早旦て将倉をとべしよ。ものこの
旨を令ちらしく准備させよと仰せバ定包扇と筋よとり御縅ざくハ
ゆんとも近年公務いと繁くして民その課役に労れり。加旃畑を打種
ものしまる比るの丑ハ潜びく出させめ人〻某ん佐つかれハよろしく
討ひひろめ土民ホ畊作に怠ひるの。往往てこれを考るのふバ雖ら仁君と
いハざるべし。これも亦民を使ふ一術なりよいかどやと云某ホ巧なりしゆゑ光
弘感嘆大ことなるもといなり所道理ホ稱へり。寔に家の老たるもれハ雖も
かくてそあるべれさとバこの後に任せんとて。列卒後者の数を省さるく那
古七郎。天津兵内ゑとの近習八九人のゝホ後行の准備させ結豆光弘ハ。
草毛の馬にうち騎て。物と牽し。夜ハ式駕させ潛ホ出ざりける。却説

山下柵左右門定包ハ豫て繰りしるの丑バ前日城より退るとゆゑ落羽
青葵の村長ホを猛に召よせられ雖近に休暇をゆるされバ翌ハ此ことの
知に出て放言せんとやふ入念この旨をこゝろ得よ。いと嚴にいひ渡ホけ丑バ
村長ホハ走りて入りて莊客們を驅使し。途の掃除に等閑目の沙汰とぐとそ
罵騰げハ杣木朴平左衛三ホハ漸ちて便宜とゆく。君ハ心本意を遂げ丑
時本れりと竊に歓び両人列卒に打扮つ弓箭も挾き出。その夜丑三の
比及て落羽照の東北ゆる夏草ゆゑ岡に躲れて。古こる松を肩ホとゑ。
定包遅し。と俟こと。短夜の丑ハ墓ゆくく鶏鳴曉を告る比長挾ホ
光弘ハ麂皮の行騰に綾蘭笠ふくしくく列卒をハ馬の前に立せ那古天津
の近臣ホハ九人と左右めくく滝田の城を出しバ山下柵左右門定包ハ豫て
非常ホ備んとて。黙兵私卒許まるく。彼白馬にうち騎つ。此一後れて

うこせてろ問ふ謀るとの見た馬奴ホさえ荷擔れて。朝立の秣に毒を加て餌さうけん光弘の乗る馬をくと十町あまりふしく。暴に病て拍とも進まず前足折て撲地と仆せぬ。もに俯に輾びかゝると那古七郎。天津兵内慌忙た技起して。ちん騎替とと。く牽と声を呼ぶ喚立れば後者更に劇忌く後陣へ。此こと告しぶ柵尤定包ハ轍を揚て走らし来る馬を肉りとをうたちく光弘はまうしに乗ぶ。潜びて獵に出させ給へば。そ乗ちくぶハ准備せざりし騎替を給ぶ。後に時や移らん某が馬はいと矣。年来日ごろ畜押せしに鞍味もいと愛さし。乗せ給へとそぶやく。轡を牽よ。光弘忽地乱色をのぶく立させる床几とをのち。おらばその意に任せ。後ハあくに休ひく。弓ゲ騎替に乗て来よ。のども急げといひあくと轡をを掛跨ぶ馬の尾筒も戦ぐ旦開風見が系の卯花も東も白くの隨に射立

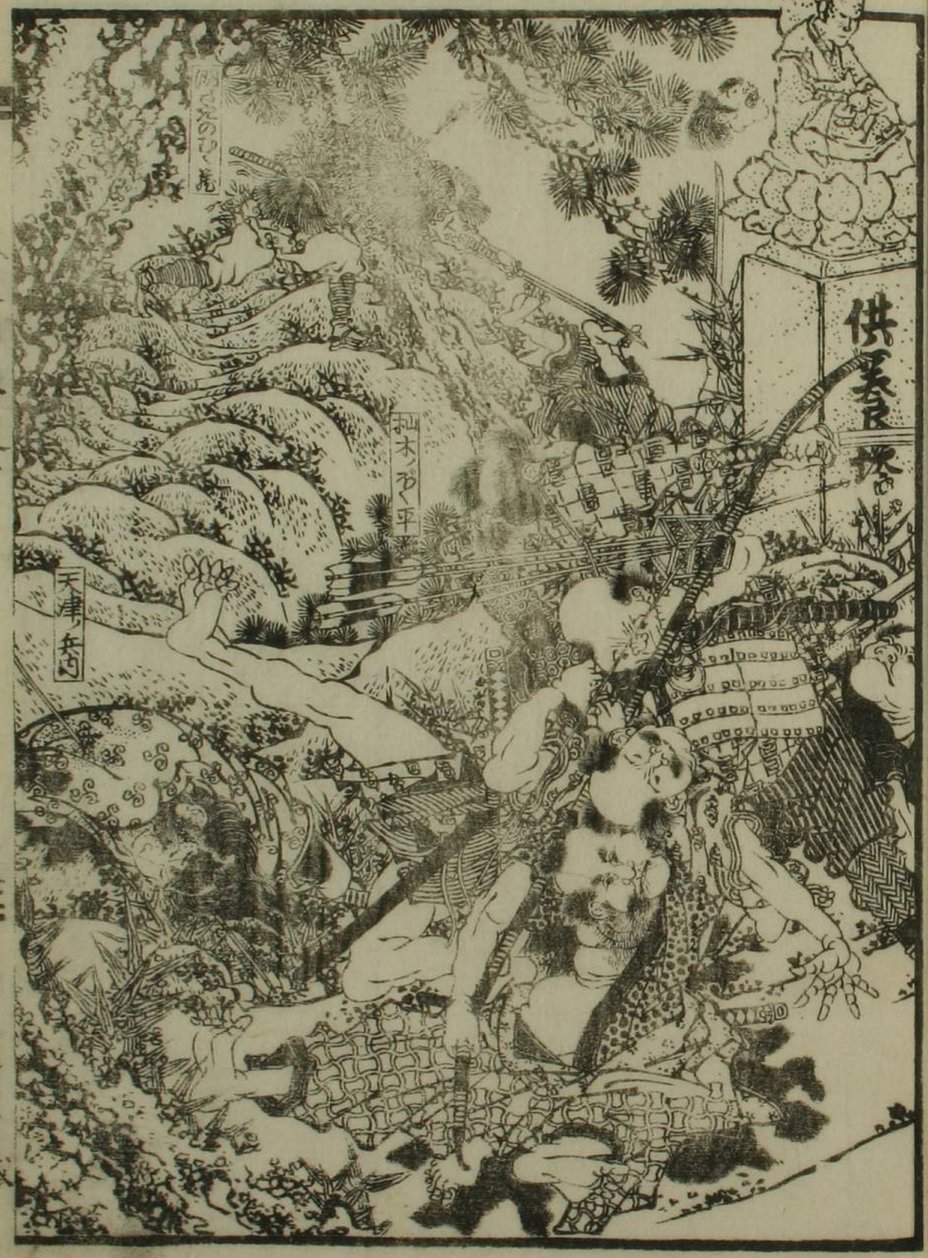
隙る死病羽の蔭羽暗に近つたぬこの日の俱にたちくし那古天津の臣のを山下ぶ薩弦仰ぶぶ主に仕て大くこの誠心あるあるれ。このとを光ふうやあり名先に立る列車小海に。青葉村のくくとく猛に途弦くれんとをこれば。光弘これと誘りく。後ホハ何処へ行るぞけの将場ハ蔭羽が家人この北ハ小笠原のくく寂恋る狩と敦圍へ七郎兵内左右より。密やふ。ふくまう君ハ暗くを。乗馬の暴に斃仕てる。吉祥へとハ見ぬに蔭羽に蔭馬乃青刑かゝへ名詮自性甚忌し。加以室町殿の武威撓く。兵乱休と死る死めくく安房ハ東南の盡処のをとども。図ホ野心のめるとハ心ものひゝ出る弦潜びく出させふ見とくいとも危さに忌諱をも避ぶ不祥ゆ憚のハぶ遠死慮やゝ。ゆさびハ近死憂といくふ。ぶ猛に途弦かくんと。ぶ。この敵に。ぶと両人弁一練れば光弘ぶて冷笑ひ女〻ぶ

いとあるる活る物ハ必死を繫ー馬よ仁のうあらん。さるべ又けふの將場に蒐馬と
嗚ぞ嘶うーあくを光蒐羽ハ蒐る鳥るのるべ獲多るる祥るのくべや。彼方へ行ま。と
鐙を鳴らくー。馬の足撥を早むるべ。那古天津ホハせんまべゆ。るる草繫死暇
道初のごく先を追くく。蒐素ホ暇の邉るる蒐素が岡よ来よ名れば霄ようる
あくよ躲れる杣木朴平。洲崎を垢三。木立の隙より佶とイく白馬よ騎
くるん紛ふべうもあくごりける。山下柵左衛門定色へさんとく伏るる弓小笹前刺て。
きりくと弯絞り。矢比近くるる隨よ一二を定ゆく。弾と蒐せば寛違ゆ。一の
矢よ光弘ハ白月を射られく。叫びもあへべ仰さるよ馬より横と蒐ーくこれハ。
と駭く天津兵内二の矢よ吭をぐさと射ぐ。おるのーまくよ仆ーり。
もん癖者よといふ往ふ後者ホハ劇騒ーのく敵のヨ少を測くて射ぬたん
とるまさりくるべ。那古七郎眼を瞪くーいふびひるる人くるる今眼前ホ主を

射ーく。何ら嘖嘖とあらん。ようや木立ハ浄くとも。数町よ足ようぬらの岡の樹を伐
草茂芟竭くくも。捜出さぐ己べ死欲と罵あくぎ刀を抜く。主よ離れ〜馬乃
障泥を切とくく肩くん。引被ぬく走登ぬハ衆皆こるホ激さを讐を
定くホ認ゆねども。るを輕ぬとくんと進みけり。朴平を垢三これをえて迫づけ
てハくるのハぐとく。樹立の蔭より顕を出さんくよ射ぐ。先よをを列来
十餘人瞬間よ射殺さる。ちくれども彼両人ハ矢種もちくよ竭ーくべ弓と鳶哩
と投棄く。大刀真額よ抜翳ー。岌よ懸く砕ぬるハの勢ひよ碎易ーく。
奴隷ハ大くさ逃失くり。残るハ近臣七八人力を戮ーく戦へども不知紫門乃山
陂るの。株よ跋さ。藤蔓よ足をとくるを。
るくりけり。そぐ中よ那古七郎ハ且く賊を疲労ーく。坦地へ雑引出さんとく。
且戦ひ且走ぬハ垢三ハ先よ進ま。朴平ハ後よ続く。脱さぐと追蒐るる。

北六の山青堂蔵

落羽岡小
村平三垣三
光弘の
近習ど
山下定之
那古七郎


供養塔
松木ゆ平
天津ノ兵内

坂を下りしが七郎佶とんくりくと忽地礫と打掛る。礫は垣三額を傷られ。目眩たてや倭僧ところ弐那古は雌ゆとり走り出でく。垣三が隅ゆとり。乳の上くりくと砕る斬られて仆る、背の上はのぼーかんて頭撥落ーと。あぐらんとさるる程は朴平は血刀引提て。起るのおもく走り来る。七郎が右の肘をぐとりすぎんと砕落し。怯む処突倒しく。再三こびて刺を刃は流を下垂る血を喝こく。右ぐー咽喉を洞を折。前面の樹蔭は弦音ーくく。誰とい右ぐ飛矢は朴平が股を射こく。倒れんとこく。膝を突笛矢柄を砕く抜捐ぎ耳を貫く開の声。胡は吐と響ーく。捕ゆの兵数十人。ぞや生ぞと取巻こう。當下山下柵左衛門は前を負弓を挾こく。岡の檜は馬を馳こう出四の馬ゆは数代の主。民の為ゆは父母こうの敵を。戕ひなり逆賊は山下定包を恐こう。目今一前は射こく殺さんは鐵の鎚をもく。鶏卵を碎くこう易れども。

衆所を除しは生こうぐう。捕捕すれと思べこう。彼縛めよと令されば威風は靡く。駿兵の大勢は捕ぎと聞こう。朴平は定包と名告るを仰く仰天。原来こう。箭は射こく落せしは人喫馬はあらざりけり。謀りしとは知るの驍の將と齟齬こく。國主を害ーこれば反逆の罪脱こく途なーー。恐は積る山下定包揮撃は。さべ多しとこく甲高ところ小引退死草は伏木を潜り。見首は顕を。彼首は隠れこく。且く防ぎ戦ふめこう。矢傷は進退ぢこは似ぎ。砕れども。郷ども大勢は捕ゆはこう。累こく。とかくもれども定包は近づく。城は迫ぎ。見こくぐれとも。ぞひこん。腹を切こんとする処。城先は進ーー。両三人左右こう。組留て。こく。索とかけーこう。定包は時を移さば。交は黥兵を部ーこく。癖者の丈。豈を隠こく。捞索は。故こう件の二人は外は隠れ潜ぶりのこうけり。浩然は城中こう。老黨若黨数十人轎子を扛ーこう。主の迎はあり。しこう。定包縁留を

告て彼光弘の亡骸を轎子へ撞入させ。又その肱を縛る朴平を牽立させ。無垢三が首級をとらせて主の死骸の後に跟て。滝田の城にかへりしかバ衆皆呆果たるのミ家の老なども亦あへまうさず只定包が権威におそれて絶て一句も渠を詰ず当座に賊を搦しとの言ハ皆称賛せざりしハ是よりして定包甲斐なく傲慢なり。諸司ともいハず近習ともいハず奴僕のごとく召使ひ次の日光弘の棺を出して香華院へ送る程に罪人杣木朴平ハ手痍に堪ざるに間もなく苛に打責られて。その日獄屋に死けれバ定包今更に首を刎させ。無垢三が首級もろとも青竹の串にさして棟の梢に梟けり。加以日来已を識るもの等ハ皆朴平が大党なりとて一人も洩さず搦捕り。ことごとく殺してけり。されバ朴平無垢三ハ海岸の民なれども武藝力量人に勝れ神餘が家臣等も要せざる賊臣定包を撃んとせし志ハ剛なれども彼が梟雄の智に勝ことかなハず。

不覚に仇の悪を佐けて。斃の人を連累せり。無慙といふも餘あるべし。却説山下定包ハ縡十二分に謀得てけれバ有一日老臣近臣等を城中へ召聚て会違なくあつまりけるとき其縡の為に作定包ハ長袴に烏帽子の掛緒長しく太刀を蹺つゝ上座に推居り。又礼服の下に身甲きたる力士十二人を傑立て。おのが左右に侍らせさて衆人に対ていふやう。先君不慮に世を去りたまひて。ちいさき子ひとりもましまさず。麻呂氏も女子のみにして男子なし云々いふかしくよろふんと間つ席を見わたし且る両郡を問上ぞなもあらく。衆もろともにまうすやう。山下大人ハ徳ありて先君に功あること鎌倉の執権たる北條氏にも倍なり。ゑ世子を求んより。みづから両郡を知召れよかし君と仰ぎ奉りて忠勤を励んこそ臣のこゝろのよろこびなれど。あるいは節を曲て媚て回答しかバ定包莞尓とうち笑て。さらバそれにて徳なけれども今しばし衆

紙は後ろ指ひかれの望を失ひて、この城をのがれ保ちがたけん。されば且攝州二郡を領して、
徳ある人を選ばべし。野心を存ずるところの者どもとて、誓書に血を注ぎ更に酒宴を
信じて禄をとらせ給へ。萬歳と祝ひけり。かゝる後定包が滝田の城を再び
王下と云ひをなり。王梓をおのゞ嬌妻に
かゝるゝ枕席にまくらさせ富貴歓楽を極めしかば威を鄰郡に示しとぞ。館
山の館へ使者を遣し。定包不肖ゆゑ衆人に推されて長狭平郡の
主となりぬ。かれば天に両君なし。好を結んと云ふのゝ此方よりや推さまゝ貴方
よりや来臨ありの左右は賢慮によるべし。といと丁礼ゆゑいはせしかば麻呂安西は
呆果て唖と成りて返答もなくその使者と共に
けつまさんとこの館山の城主なる安西三郎太夫景連は力剛く心悍くて、ある時の線を
好めども乱に流れ決断なく又平館の城主なる麻呂小五郎信時は利に進を

人を傷る貪婪匹夫の勇将なれば安西に諜し合せて定包を討んとて有一日近
臣のゝを招き潜に館山の城に赴き景連に對面して定包が緯の効なきを説き
密謀に和殿某力を戮せて安房朝夷の軍兵を引率し滝田の城を攻んゆへ
勝利疑ひなし定包脆く首を授く彼両郡どころもとゞ悩ぶべし。
と忽率に勸説せば景連は左右ようち掉臂内坂東大ところのゞ兵乱を
苦めども安房は年来吾古又ゆゑに士卒軍馬のうへに熟習ぶ。彼山下は大身なれば主の
所領を乱れ流さぐるとおもはるる彼必ずその才その智測ぶ。衆徒を推さるゝ士
と仕へ貳なへその徳その義推し知るべし。天の時は地の理に人の
和にまさぐ定包既に時を沿へ地を沿へ人の和を沿へり。自他の分限を量らぶて
牛角の合戦ぶりに且く渠に帰降ぶ。當郡へ雑引に伏兵とりそへ急ぶ餐び擣ぶ
まるとのあぐ仇敵をとどめ撲楚鴻門の一會ぶ彼范増が策成らぶ労して功なる

のこゝろざしで草を折く蛇よ驚く。後悔甚の処よ去がたし。早く時を俟べし。こゝに滝田よ
変を生じ。衆人離心貳くに至らば攻どとも必潰んとあなどり入れ信時
千遠とゝて浅論區区なるべし。安西が近臣遠〻廊より遠う来さへ障
子を推開て目くゝ乱色と疑知の招よ主の亲連佶とゝて仔ぞと問ふ小船をとゝあ
里見又太郎義実と名告れる武士年十八九とおぼしけれ。後者僅に二人とおぞ推
亲〻くいらゝてその来由を尋ぬ。下総結城の落人ゝ父季基は結城の
弟八枝倉堀内とのゝ両個の老臣とも相模路へ渡海して富国
白濱へ来たるとゝ。この餘の親意ハ人伝るよゝ入るべしとゝあらぬ。こゝ
ゝ他ゝもの〻ゝ〻ゝ。と縛ゝ臣ゝく告ゝ。景連
頓て回答ゝ。そハゝゝ。とぞゝ。眉を顰め沈吟して

南總里見八犬傳巻之一 終